

第七十一回県俳句大会選考結果

特別選 「当季雑詠」

橋本 榮治 氏 選

◎人 位

青りんご素手にて割るや家郷なる

青 森 蝦名 石蔵

【評】青りんごを素手で割るということはあまり

ない。ふるさとだから、母の家だからできる。「家

郷なる」という言葉が効いている。

◎佳 作 (20句)

芒原栄耀一睡十三湊

青 森 布施 協一

ひぐらしや斗南藩士の住みし跡

青 森 中島 五郎

ネブタ師と同じ目をして武者ねぶた

青 森 加藤健一郎

十年の介護を尽す端居かな

青 森 塙 ひさ

干し網に風の膨らむ浜施餓鬼

弘 前 泉 風信子

千空がゐさうな十三の盆踊

五所川原 福士 信之

一湾の沖は海峡雲の峰

青 森 石戸 キコ

せかさるることなき暮し小鳥来る

弘 前 花田 晶子

もう君はいず八月の柱時計

十和田 佐々木寿子

風を恋ふ風待ち港鳥賊を干す

平 川 西谷 是空

◎天 位

路地売りの尻まで紅き林檎買ふ

八 戸 吉田千嘉子

【評】「尻まで紅き」はリアリティーがある。完熟

のリンゴなのでしょう。こういうところに住んで

みたいと選者に思わせるだけの力のある句。

◎秀 逸 (5句)

まだ小屋に林檎梯子と地下足袋と

青 森 小野 寿子

廃校に一夜の踊櫓建つ

む つ 飯田 知克

千空碑まで大いなる花すすき

弘 前 畠山 容子

真心の赤といふべし林檎亨く

十和田 大川 恵子

津軽野に風吹き替るりんご挽ぎ

弘 前 対馬 迪女

◎地 位

筒鳥や田毎に水の移る音

十和田 日野口 晃

【評】棚田で落とし水によって田ごとに水が移っ

ているのを想像し、「筒鳥」が効いていると思っ

た。景色がいいということがこの句の取りえ。

特別選「当季雑詠」

降神の大太鼓打ち夕俣武多

青森 佐藤多太子

虫しぐれ水飲み夜をしめくくる

青森 敦賀 恵子

父の顔知らで八月十五日

弘前 石崎 志亥

秋蝶のやがてまぎれて風の色

十和田 小林 五月

露涼し大きく見ゆる今朝の山

青森 高木 良子

秋夕焼茂吉記念館前でふ無人駅

青森 宮川 暢子

灯を入れてますますおがる立ねぶた

八戸 木附沢麦青

生涯の一句まだなし零余子飯

八戸 三ヶ森青雲

滴りし汗泥塗れあと一球

佐井 渡邊 寂隆

誕生日りんごのくにの林檎食む

五所川原 森下 睦子

宿題「芒」

【読み】すすき
 【傍題】薄、尾花、花芒、鬼芒、糸芒、十寸穂の芒、真緒の芒、縞芒、鷹の羽芒、芒原など。(歳時記によつては、他にもある場合があります)

後藤 岑生 / 畑中とほる
 日野口 晃 / 西谷 是空
 野村 英利 / 三ヶ森青雲
 吉田 紅一 / 木村あさ子
 関 礼子 / 高橋 千恵
 千葉 禮子 / 能登谷明子
 松宮 梗子 / 南 美智子
 (以上、十四氏共同選)

後藤岑生氏選

◎推 薦 (5句)

遙かより亡夫の呼ぶ声夕芒

鱒ヶ沢 南 美智子

芒原昭和に抜ける穴がある

青 森 川村 英幸

消えてゆく山里ばかり芒原

青 森 佐々木一湖

芒野へ六十路の四肢を解き放つ

青 森 櫻庭 和浩

芒咲き四角に坐る黒い牛

五所川原 松宮 梗子

◎佳 作 (20句)

芒野やけもの帰れば風ばかり

青 森 阿部みづき

花芒生涯の地に傘寿越ゆ

青 森 塙 ひさ

夕芒風棲む村の水ゆたか

青 森 千葉 禮子

淋代の海引き寄せてすすき原

十和田 日野口 晃

少年の高き指笛青芒

むつ 高橋千夜湖

開拓のいしぶみ埋る芒原

青 森 竹村 俊郎

思ひ出を消しゆく月日花芒

青 森 木村 秋湖

すすき野や返還の文字ゆれもせず

青 森 秋谷美智子

五能線過ぎたるあとの芒波

深 浦 草野 力丸

この先は松陰道よすすき村

弘 前 竹浪 克夫

遠景の母の声せり芒原

青 森 能登谷明子

縄文の風遙かなり芒原

青 森 清野 和子

余生とは死出の助走路すすき原

平 川 後藤 朋子

秀峰の芒遊ばす裾野かな

青 森 宮川 暢子

芒野や夕陽溶け込む日本海

青 森 工藤 邦子

宿題「芒」

穂すすきや土手に流るる揺籃歌

弘前 長尾 青竜

奔放に風をあしらふ花芒

八戸 三ヶ森青雲

墓守の覚悟で嫁せし花すすき

八戸 高橋 千恵

芒刈る父の十八番の「牛追ひ唄」

青森 齊藤 君子

叢叢の風のありたるすすき原

青森 黒滝 綾子

畑中とほる氏選

◎推 薦 (5句)

たてがみの吹かれて芒の野に隠る

藤崎 五十嵐かつ

穂芒や川面に夕日照り返し

むつ 永倉 みつ

こんと啼く影垣間見し芒原

大間 金田 一一子

何禱る合掌土偶や花芒

むつ 杉山 畝女

廃校の門より高き芒かな

八戸 田端 千鼓

◎佳 作 (20句)

下町の八百屋に芒買ひにけり

青森 布施 協一

分校の跡地はいづこ芒原

青森 中島 五郎

十二湖に湖いくつ花芒

弘前 笹原 郁子

花芒生涯の地に傘寿越ゆ

青森 塙 ひさ

撫でられてはっと振りむく夜の芒

十和田 村松 圭治

淋代の海引き寄せてすすき原

十和田 日野口 晃

芒野や名残をとどむ開拓地

むつ 飯田 知克

ゆうすすき鎮もる猿ヶ森砂丘

青森 三橋 聖

花芒一時停止を念入りに

五所川原 福士 信之

一の坂登り切ったる芒波

青森 長島 喜美

白神や芒に残る夕茜

青森 山口せつ子

しろがねの風が風追ふ芒原

青森 今村 光子

この先は松陰道よすすき村

弘前 竹浪 克夫

秘湯へと抜ける峠の花芒

十和田 稲場 暁子

母老いて祖母のごとしや花芒

弘前 聖 雪

花芒在所に増えし休耕地

階上 伊藤 幻人

脚太き尻屋の馬やすすき風

つがる 石田かつら

階段のここも国道花すすき

弘前 千葉 新一

芒野や夕陽溶け込む日本海

青森 工藤 邦子

山頂は雲の中なり芒原

弘前 対馬 迪女

宿題「芒」

日野口晃氏選

◎推 薦 (5句)

かくし田の畦のやはらか花すすき

青 森 小野 寿子

穂芒や川面に夕日照り返し

む つ 永倉 みつ

母老いて祖母のごとしや花芒

弘 前 聖 雪

若き日の過ち淡く芒原

青 森 小林 とみ

一群の芒と三和土残りをり

青 森 対馬智恵子

花芒放置自転車囲みけり

青 森 米塚 みゑ

開拓のいしぶみ埋る芒原

青 森 竹村 俊郎

その先は廢鉞の山すすき原

八 戸 吉田千嘉子

芒野へ六十路の四肢を解き放つ

青 森 櫻庭 和浩

縄文の風遙かなり芒原

青 森 清野 和子

階段のここも国道花すすき

弘 前 千葉 新一

秀峰の芒遊ばす裾野かな

青 森 宮川 暢子

風強し一糸乱れぬ芒かな

青 森 山内 恵子

花芒岬のはての千空碑

弘 前 桜庭 恵

凜と立つ備前の壺の芒かな

弘 前 大瀬 響史

半島の崖に波打つ花芒

十和田 中村しおん

好きな人ばかりを誘ひ芒原

八 戸 古川 恵理

連山の紫紺に暮るる芒かな

弘 前 小田桐素人

山頂は雲の中なり芒原

弘 前 対馬 迪女

良くも悪くも縁のある人花芒

青 森 土田 雅子

放牛の群れをまばらに芒照る

五 戸 鈴木志美恵

廢校の門より高き芒かな

八 戸 田端 千鼓

花芒さらさら詩人めく心

弘 前 吉田 紅一

活けてまだ靡くかたちに花芒

八 戸 佐藤 幸子

◎佳 作 (20句)

芒野に風の棲みつく村一つ

青 森 後藤 岑生

花芒岬のはての千空碑

弘 前 桜庭 恵

半島の崖に波打つ花芒

十和田 中村しおん

連山の紫紺に暮るる芒かな

弘 前 小田桐素人

花芒放置自転車囲みけり

青 森 米塚 みゑ

開拓のいしぶみ埋る芒原

青 森 竹村 俊郎

その先は廢鉞の山すすき原

八 戸 吉田千嘉子

芒野へ六十路の四肢を解き放つ

青 森 櫻庭 和浩

縄文の風遙かなり芒原

青 森 清野 和子

階段のここも国道花すすき

弘 前 千葉 新一

秀峰の芒遊ばす裾野かな

青 森 宮川 暢子

風強し一糸乱れぬ芒かな

青 森 山内 恵子

花芒岬のはての千空碑

弘 前 桜庭 恵

半島の崖に波打つ花芒

十和田 中村しおん

連山の紫紺に暮るる芒かな

弘 前 小田桐素人

良くも悪くも縁のある人花芒

青 森 土田 雅子

放牛の群れをまばらに芒照る

五 戸 鈴木志美恵

廢校の門より高き芒かな

八 戸 田端 千鼓

花芒さらさら詩人めく心

弘 前 吉田 紅一

活けてまだ靡くかたちに花芒

八 戸 佐藤 幸子

西谷是空氏選

◎推 薦 (5句)

わたつみの声啾々と芒原

青森 牧 ひろし

芒原あるかも知れぬ失せし物

青森 木村 栄子

密葬の意を子に告げり糸芒

五所川原 櫛引 麗子

余生とは死出の助走路すすき原

平川 後藤 朋子

すすきに穂そろそろ風を離れたし

青森 安田真知子

空と海分かつ光のすすきかな

弘前 畠山 容子

ゆうすすき鎮もる猿ヶ森砂丘

青森 三橋 聖

花芒一時停止を念入りに

五所川原 富士 信之

翳るたび景緊りゆく芒原

十和田 大川 恵子

思ひ出を消しゆく月日花芒

青森 木村 秋湖

權八本ぴたり息合ひ花すすき

青森 山口 彰

芒野の翳りはじめて帰心かな

青森 樋口 栄子

余生てふ肩の軽さよ花芒

十和田 佐々木寿子

芒野へ六十路の四肢を解き放つ

青森 櫻庭 和浩

撫でられてはつと振りむく夜の芒

十和田 村松 圭治

背負籠中に穂すすき赤すすき

十和田 江渡永見子

母老いて祖母のごとしや花芒

弘前 聖 雪

階段のここも国道花すすき

弘前 千葉 新一

芒葉に切られた指で芒折る

青森 下山みのる

活けてまだ靡くかたちに花芒

八戸 佐藤 幸子

一群の芒と三和土残りをり

青森 対馬智恵子

◎佳 作 (20句)

分校の跡地はいづこ芒原

青森 中島 五郎

すすき原指の先より児の寝落つ

大間 木村泰佳子

白光の中へいざなふ芒原

弘前 斎藤ひでを

芒原風千畳を奪ひあふ

おいらせ 野村 英利

野村英利氏 選

◎推 薦 (5句)

連山の紫紺に暮るる芒かな

弘前 小田桐素人

余生てふ肩の軽さよ花芒

十和田 佐々木寿子

階段のここも国道花すすき

弘前 千葉新一

廃校の門より高き芒かな

八戸 田端 千鼓

活けてまだ靡くかたちに花芒

八戸 佐藤 幸子

◎佳 作 (20句)

芒野に風の棲みつく村一つ

青森 後藤 岑生

わたつみの声啾々と芒原

青森 牧 ひろし

甕棺の埋もるる丘や花芒

青森 太田 直樹

思ひ出を消しゆく月日花芒

青森 木村 秋湖

權八本びたり息合ひ花すすき

青森 山口 彰

灯台へ道は一本芒原

むつ 畑中とほる

花芒在所に増えし休耕地

階上 伊藤 幻人

稜線を遠くに風のすすき原

十和田 小林 五月

秀峰の芒遊ばす裾野かな

青森 宮川 暢子

若き日の過ち淡く芒原

青森 小林 とみ

凜と立つ備前の壺の芒かな

弘前 大瀬 響史

芒野や夕陽溶け込む日本海

青森 工藤 邦子

穂すすきや土手に流るる揺籃歌

弘前 長尾 青竜

奔放に風をあしらふ花芒

八戸 三ヶ森青雲

放牛の群れをまばらに芒照る

五戸 鈴木志美恵

峠路のなびく芒や国境

八戸 小野寺和子

叢叢の風のありたるすすき原

青森 黒滝 綾子

平凡に生きて仕合せ初芒

七戸 高田美津子

たまさかの旅の終りや花芒

青森 千葉すみれ

丈見せて活ける一本薄かな

平川 丹野 慶子

三ヶ森青雲氏選

◎推 薦 (5句)

魂は風に預けし芒かな

弘前 木村あさ子

花芒岬のはての千空碑

弘前 桜庭 恵

縄文の風遥かなり芒原

青森 清野 和子

芒野の果ての灯台竜飛崎

板柳 くどうひろこ

芒野や夕陽溶け込む日本海

青森 工藤 邦子

連山の紫紺に暮るる芒かな

弘前 小田桐素人

淋代の海引き寄せてすすき原

十和田 日野口 晃

消えてゆく山里ばかり芒原

青森 佐々木一湖

翳るたび景緊りゆく芒原

十和田 大川 恵子

甕棺の埋もるる丘や花芒

青森 太田 直樹

余生てふ肩の軽さよ花芒

十和田 佐々木寿子

花芒在所に増えし休耕地

階上 伊藤 幻人

脚太き尻屋の馬やすき風

つがる 石田かつら

縄文の風が操る芒かな

青森 新山 魏一

階段のここも国道花すすき

弘前 千葉 新一

すすき原マンモス都市を眺望す

青森 蝦名 石蔵

凜と立つ備前の壺の芒かな

弘前 大瀬 響史

花芒舟にて酒を酌み交はす

弘前 橘 すなお

追憶の中に入りたる芒原

むつ 戸川美重子

すすきに穂そろそろ風を離れたし

青森 安田真知子

峠路のなびく芒や国境

八戸 小野寺和子

廃校の門より高き芒かな

八戸 田端 千鼓

活けてまだ靡くかたちに花芒

八戸 佐藤 幸子

たまさかの旅の終りや花芒

青森 千葉すみれ

宿題「芒」

◎佳 作 (20句)

分校の跡地はいづこ芒原

青森 中島 五郎

縄文の風が操る芒かな

青森 新山 魏一

すすき原マンモス都市を眺望す

青森 蝦名 石蔵

花芒舟にて酒を酌み交はす

弘前 橘 すなお

連山の紫紺に暮るる芒かな

弘前 小田桐素人

淋代の海引き寄せてすすき原

十和田 日野口 晃

消えてゆく山里ばかり芒原

青森 佐々木一湖

翳るたび景緊りゆく芒原

十和田 大川 恵子

甕棺の埋もるる丘や花芒

青森 太田 直樹

余生てふ肩の軽さよ花芒

十和田 佐々木寿子

花芒在所に増えし休耕地

階上 伊藤 幻人

脚太き尻屋の馬やすき風

つがる 石田かつら

縄文の風が操る芒かな

青森 新山 魏一

すすき原マンモス都市を眺望す

青森 蝦名 石蔵

花芒舟にて酒を酌み交はす

弘前 橘 すなお

すすきに穂そろそろ風を離れたし

青森 安田真知子

峠路のなびく芒や国境

八戸 小野寺和子

廃校の門より高き芒かな

八戸 田端 千鼓

活けてまだ靡くかたちに花芒

八戸 佐藤 幸子

たまさかの旅の終りや花芒

青森 千葉すみれ

宿題「芒」

吉田紅一氏選

◎推 薦 (5句)

花芒生涯の地に傘寿越ゆ

青森 埜 ひさ

魂は風に預けし芒かな

弘前 木村あさ子

背負籠中に穂すすき赤すすき

十和田 江渡永見子

広重の雨ともなりて芒原

弘前 藤田 豊子

忘却をさがしに行かう芒原

むつ 井手上省子

芒野に風の棲みつく村一つ

青森 後藤 岑生

夕芒風棲む村の水ゆたか

青森 千葉 禮子

わたつみの声啾々と芒原

青森 牧 ひろし

連山の紫紺に暮るる芒かな

弘前 小田桐素人

穂芒や川面に夕日照り返し

むつ 永倉 みつ

翳るたび景緊りゆく芒原

十和田 大川 恵子

花すすき段丘遙か海に果つ

弘前 寺沢すすむ

灯台へ道は一本芒原

むつ 畑中とほる

縄文の風が操る芒かな

青森 新山 魏一

縄文の風遙かなり芒原

青森 清野 和子

海鳴りの遠く近くに夕芒

弘前 佐藤いく子

秘湯へと抜ける峠の花芒

十和田 稲場 暁子

遙かより亡夫の呼ぶ声夕芒

鮎ヶ沢 南 美智子

野に美しきもの逆光の夕芒

青森 関 礼子

芒原風千疊を奪ひあふ

おいらせ 野村 英利

追憶の中に入りたる芒原

むつ 戸川美重子

ゆさゆさと芒背負ひて柚の行く

青森 村山 いう

活けてまだ靡くかたち花芒

八戸 佐藤 幸子

ひよつとして狐の声か芒原

弘前 福士 野菊

◎佳 作 (20句)

分校の跡地はいづこ芒原

青森 中島 五郎

縄文の風が操る芒かな

青森 新山 魏一

海鳴りの遠く近くに夕芒

弘前 佐藤いく子

遙かより亡夫の呼ぶ声夕芒

鮎ヶ沢 南 美智子

木村あさ子氏 選

◎推 薦 (5句)

誰が漕ぎし芒穂波の乱れるし

深浦 蒲田 吟竜

連山の紫紺に暮るる芒かな

弘前 小田桐素人

芒野や風に湧きたつ群雀

むつ 畑中 月穂

芒原昭和に抜ける穴がある

青森 川村 英幸

すすき野や返還の文字ゆれもせず

青森 秋谷美智子

すすき原指の先より児の寝落つ

大間 木村泰佳子

かくし田の畦のやはらか花すすき

青森 小野 寿子

広重の雨ともなりて芒原

弘前 藤田 豊子

芒原あるかも知れぬ失せし物

青森 木村 栄子

その先は廢鋌の山すすき原

八戸 吉田千嘉子

五能線過ぎたるあとの芒波

深浦 草野 力丸

灯台へ道は一本芒原

むつ 畑中とほる

余生てふ肩の軽さよ花芒

十和田 佐々木寿子

芒野の果ての灯台竜飛崎

板柳 くどうひろこ

縄文の風が操る芒かな

青森 中島 五郎

芒野に風の巡礼立ち寄りぬ

弘前 高野万津江

若き日の過ち淡く芒原

青森 小林 とみ

芒原見えざる道を風とゆく

八戸 木附沢麦青

夕映えや芒の原のどこか揺れ

青森 山本もとい

廢校の門より高き芒かな

八戸 田端 千鼓

ひよつとして狐の声か芒原

弘前 福士 野菊

宿題「芒」

◎佳 作 (20句)

芒野やけもの帰れば風ばかり

青森 阿部みづき

分校の跡地はいづこ芒原

青森 中島 五郎

縄文の風が操る芒かな

青森 新山 魏一

芒野に風の巡礼立ち寄りぬ

弘前 高野万津江

すすき原指の先より児の寝落つ

大間 木村泰佳子

かくし田の畦のやはらか花すすき

青森 小野 寿子

広重の雨ともなりて芒原

弘前 藤田 豊子

芒原あるかも知れぬ失せし物

青森 木村 栄子

その先は廢鋌の山すすき原

八戸 吉田千嘉子

五能線過ぎたるあとの芒波

深浦 草野 力丸

灯台へ道は一本芒原

むつ 畑中とほる

余生てふ肩の軽さよ花芒

十和田 佐々木寿子

芒野の果ての灯台竜飛崎

板柳 くどうひろこ

山姥のかつては紅き花薄

青森 島田よう子

階段のここも国道花すすき

弘前 千葉 新一

関 礼子氏 選

◎推 薦 (5句)

連山の紫紺に暮るる芒かな

弘前 小田桐素人

開拓のいしぶみ埋る芒原

青森 竹村 俊郎

芒野や夕陽溶け込む日本海

青森 工藤 邦子

穂芒や川面に夕日照り返し

むつ 永倉 みつ

しろがねの芒野風に騒立ちて
花すすき段丘遙か海に果つ

弘前 鎌田美正子
寺沢すすむ

陽と風と戯れてゐる芒かな

青森 下山みのる
山口 刃心

幾千の光芒風の芒原

弘前 清水山楂子

広重の雨ともなりて芒原

弘前 藤田 豊子

活けてまだ靡くかたちに花芒

八戸 佐藤 幸子

白光の中へいざなふ芒原

弘前 斎藤ひでを

その先は廢鋌の山すすき原

八戸 吉田千嘉子

一群の芒と三和土残りをり

青森 対馬智恵子

奔放に風をあしらふ花芒

八戸 三ヶ森青雲

風立ちて光は波に芒原

八戸 西川 無行

芒が丘夕陽は海へ傾きぬ

青森 明才地禮子

◎佳 作 (20句)

分校の跡地はいづこ芒原

灯台へ道は一本芒原

青森 畑中とほる

海鳴りの遠く近くに夕芒

弘前 佐藤いく子

遠景の母の声せり芒原

青森 能登谷明子

大波のうねりにも似て芒原

大間 和田たかし

同じ風ひとつとあらず芒原

八戸 小泉 静子

半島の崖に波打つ花芒

十和田 中村しおん

階段のここも国道花すすき

弘前 千葉 新一

高橋千恵氏 選

◎推 薦 (5句)

花芒放置自転車囲みけり

青森 米塚 みゑ

その先は廢鉞の山すすき原

八戸 吉田千嘉子

すみっこに輝いてをり庭芒

弘前 今田とみを

密葬の意を子に告げり糸芒

五所川原 櫛引 麗子

同じ風ひとつとあらず芒原

八戸 小泉 静子

◎佳 作 (20句)

芒にも芒の重さありにけり

弘前 成田のり子

花芒生涯の地に傘寿越ゆ

青森 埴 ひさ

大波のうねりにも似て芒原

大間 和田たかし

花芒岬のはての千空碑

弘前 桜庭 恵

たてがみの吹かれて芒の野に隠る

藤崎 五十嵐かつ

芒原幼ナの鳩笛風にのる

青森 阿部 なつ

ゆうすすき鎮もる猿ヶ森砂丘

青森 三橋 聖

開拓のいしぶみ埋る芒原

青森 竹村 俊郎

しろがねの芒野風に騒立ちて

弘前 鎌田美正子

広重の雨ともなりて芒原

弘前 藤田 豊子

薄道あの日走って紙芝居

青森 高森ましら

白光の中へいざなふ芒原

弘前 斎藤ひでを

秀峰の芒遊ばす裾野かな

青森 宮川 暢子

凜と立つ備前の壺の芒かな

弘前 大瀬 響史

芒野や夕陽溶け込む日本海

青森 工藤 邦子

山頂は雲の中なり芒原

弘前 対馬 迪女

夕映えや芒の原のどこか揺れ

青森 山本もとい

廢校の門より高き芒かな

八戸 田端 千鼓

たまさかの旅の終りや花芒

青森 千葉すみれ

丈見せて活ける一本薄かな

平川 丹野 慶子

宿題「芒」

宿題「芒」

千葉禮子氏選

◎推 薦 (5句)

師弟愛こもる碑文や花芒

弘前 小田桐耕風

かくし田の畦のやはらか花すすき

青森 小野 寿子

芒野や夕陽溶け込む日本海

青森 工藤 邦子

分け入りて芒の中へかくれんぼ

青森 秋元エミ子

震災を忘れし国や芒原

八戸 門前休太郎

花芒岬のはての千空碑

弘前 桜庭 恵

空と海分かつ光のすすきかな

弘前 畠山 容子

山頂は雲の中なり芒原

弘前 対馬 迪女

余生てふ肩の軽さよ花芒

十和田 佐々木寿子

花すすき段丘遙か海に果つ

弘前 寺沢すすむ

芒咲き四角に坐る黒い牛

五所川原 松宮 梗子

墓守の覚悟で嫁せし花すすき

八戸 高橋 千恵

甕棺の埋もるる丘や花芒

青森 太田 直樹

茶目つけは未だ健在芒道

五所川原 森下 睦子

平凡に生きて仕合せ初芒

七戸 高田美津子

思ひ出を消しゆく月日花芒

青森 木村 秋湖

何禱る合掌土偶や花芒

むつ 杉山 畝女

◎佳 作 (20句)

密葬の意を子に告げり糸芒

五所川原 櫛引 麗子

海鳴りの遠く近くに夕芒

弘前 成田のり子

花芒在所に増えし休耕地

階上 伊藤 幻人

花芒生涯の地に傘寿越ゆ

青森 塙 ひさ

釣糸の光る一瞬風すすき

七戸 川村亜輝子

月光に波ひたひたと芒揺れ

青森 小野いるま

凜と立つ備前の壺の芒かな

弘前 大瀬 響史

能登谷明子氏選

◎推 薦 (5句)

花芒放置自転車囲みけり

青森 米塚 みゑ

五能線過ぎたるあとの芒波

深浦 草野 力丸

鳥獣の遊ぶが如き芒原

青森 中谷 恭子

追憶の中に入りたる芒原

むつ 戸川美重子

ゆさゆさと芒背負ひて柚の行く

青森 村山 いう

◎佳 作 (20句)

下町の八百屋に芒買ひにけり

青森 布施 協一

芒にも芒の重さありにけり

弘前 成田のり子

縄文の風が操る芒かな

青森 新山 魏一

誰が漕ぎし芒穂波の乱れるし

深浦 蒲田 吟竜

芒野に風の棲みつく村一つ

青森 後藤 岑生

大波のうねりにも似て芒原

大間 和田たかし

半島の崖に波打つ花芒

十和田 中村しおん

開拓のいしづみ埋る芒原

青森 竹村 俊郎

広重の雨ともなりて芒原

弘前 藤田 豊子

芒原あるかも知れぬ失せし物

青森 木村 栄子

風立ちて光は波に芒原

八戸 西川 無行

こんと啼く影垣間見し芒原

大間 金田一一子

思ひ出を消しゆく月日花芒

青森 木村 秋湖

何禱る合掌土偶や花芒

むつ 杉山 畝女

姉見舞ふための杖なり花芒

藤崎 清水 雪江

幾千の光芒風の芒原

弘前 清水山植子

忘却をさがしに行かう芒原

むつ 井手上省子

好きな人ばかりを誘ひ芒原

八戸 古川 恵理

奔放に風をあしらふ花芒

八戸 三ヶ森青雲

廃校の門より高き芒かな

八戸 田端 千鼓

松宮梗子氏選

◎推 薦 (5句)

遙かより亡夫の呼ぶ声夕芒

鱒ヶ沢 南 美智子

花芒放置自転車囲みけり

青 森 米塚 みゑ

すすき野や返還の文字ゆれもせず

青 森 秋谷美智子

五能線過ぎたるあとの芒波

深 浦 草野 力丸

活けてまだ靡くかたちに花芒

八 戸 佐藤 幸子

芒原昭和に抜ける穴がある

青 森 川村 英幸

消えてゆく山里ばかり芒原

青 森 佐々木一湖

開拓のいしぶみ埋る芒原

青 森 竹村 俊郎

一の坂登り切ったる芒波

青 森 長島 喜美

灯台へ道は一本芒原

む つ 畑中とほる

幾千の光芒風の芒原

弘 前 清水山楂子

大地震や産土といふ芒原

野辺地 後藤 瑞江

芒原風千疊を奪ひあふ

おいらせ 野村 英利

芒野の果ての灯台竜飛崎

板 柳 くどうひろこ

階段のここも国道花すすき

弘 前 千葉 新一

芒野や夕陽溶け込む日本海

青 森 工藤 邦子

芒原見えざる道を風とゆく

八 戸 木附沢麦青

すすきに穂そろそろ風を離れたし

青 森 安田真知子

放牛の群れをまばらに芒照る

五 戸 鈴木志美恵

廃校の門より高き芒かな

八 戸 田端 千鼓

茶目つけは未だ健在芒道

五所川原 森下 睦子

◎佳 作 (20句)

分校の跡地はいづこ芒原

青 森 中島 五郎

十二湖に湖いくつ花芒

弘 前 笹原 郁子

花芒岬のはての千空碑

弘 前 桜庭 恵

連山の紫紺に暮るる芒かな

弘 前 小田桐素人

南美智子氏 選

◎推 薦 (5句)

芒原昭和に抜ける穴がある

青 森 川村 英幸

芒野の翳りはじめて帰心かな

青 森 樋口 栄子

灯台へ道は一本芒原

む つ 畑中とほる

山姥のかつては紅き花薄

青 森 島田よう子

一群の芒と三和土残りをり

青 森 対馬智恵子

花すすき段丘遙か海に果つ

弘 前 寺沢すすむ

白神や芒に残る夕茜

青 森 山口せつ子

甕棺の埋もるる丘や花芒

青 森 太田 直樹

思ひ出を消しゆく月日花芒

青 森 木村 秋湖

しろがねの風が風追ふ芒原

青 森 今村 光子

すみっこに輝いてをり庭芒

弘 前 今田とみを

野に美しきもの逆光の夕芒

青 森 関 礼子

芒原風千疊を奪ひあふ

おいらせ 野村 英利

同じ風ひとつとあらず芒原

八 戸 小泉 静子

日当たれば山の産毛や金芒

青 森 榊 せい子

階段のここも国道花すすき

弘 前 千葉 新一

芒原見えざる道を風とゆく

八 戸 木附沢麦青

ゆさゆさと芒背負ひて柚の行く

青 森 村山 いう

小鳥飛ぶさゞめく朝の芒原

東 北 附田 チマ

放牛の群れをまばらに芒照る

五 戸 鈴木志美恵

廃校の門より高き芒かな

八 戸 田端 千鼓

宿題「芒」

◎佳 作 (20句)

芒野に風の棲みつく村一つ

青 森 後藤 岑生

芒野に風の巡礼立ち寄りぬ

弘 前 高野万津江

芒野や風に湧きたつ群雀

む つ 畑中 月穂

消えてゆく山里ばかり芒原

青 森 佐々木一湖

席題A
「稲架」

【読み】 はぎ
 【傍題】 はぎ、稲掛、掛稲、稲木、稲城、田母木、稲棒、稲干す、など。(歳時記によつては、他にもある場合があります)

大瀬響史氏選

◎天 位

稲架掛けて都会の嫁の薄化粧

青森 後藤 岑生

◎佳 作(20句)

稲架組むや奥羽山脈果つる村

青森 蝦名 石蔵

さやと吹く風に潮の香稲架を組む

深浦 蒲田 吟竜

農を辞すこと決めきれず稲架を組む

弘前 木村あさ子

稲架棒の雑兵のごと雨に佇つ

弘前 桜庭 恵

稲架積みの足跡に見の足跡も

十和田 日野口 晃

千の空方の空なる稲架の空

青森 前田 良三

稲架かけてバンザイの子や肩車

青森 三橋 聖

稲架掛ける一村包む日の匂い

青森 明才地 禮子

稲架並ぶ曲りし畦に曲るまゝ

五所川原 三橋 浩二

白神の裾まで晴れて稲架を組む

深浦 草野 力丸

◎人 位

稲架組んで息子は町へ出勤す

十和田 佐々木 寿子

大瀬 響史 氏 選

中村 しおん 氏 選

吉田 千嘉子 氏 選

草野 力丸 氏 選

棒稲架と獅子波へだつ五能線

五所川原 櫛引 麗子

稲架仕舞それぞれ違ふ夢を見る

おいらせ 野村 英利

稲架組むや村に一戸の大家族

青森 七戸 富美子

追伸に稲架の匂ひを添へにけり

東北 井上 福子

席題A「稲架」

稲架続く津軽鉄道うねうねと

むつ 杉山 畝女

稲架抜きし穴に農夫の愚痴溜まる

平川 西谷 是空

若き子の農に帰りて稲架高し

弘前 竹浪 克夫

骨太は津軽の血筋稲架を組む

弘前 聖 雪

稲架組んで一揆の村に影つくる

つがる 石田かつら

稲架並ぶ向ふ校舎の白光す

青森 島田よう子

稲架棒を農一徹の父が挿す

青森 榊 せい子

稲架を組む無言のままの夫婦かな

青森 山内 恵子

背が少し縮んだ妻と稲を掛け

青森 下山みのる

稲掛けのなで肩に日の溢れゐて

五所川原 森下 睦子

中村しおん氏選

◎天位

稲架棒の雑兵のごと雨に佇つ

弘前 桜庭 恵

◎地位

一湾の潮の香かさね稲架を組む

青森 赤坂 雪洲

◎人位

ひと跨ぎほどの島の田稲架低し

板柳 くどうひろこ

◎秀逸(5句)

稲架どこに組みても岩木晴れわたる

青森 埴 ひさ

稲架の列妻の洗濯よく乾く

弘前 泉 風信子

稲架を組む基点の杭に朱のしるし

八戸 西川 無行

山の田の稲架の低きがもう翳る

平川 後藤 朋子

青空を一枚稲架へ掛けてやり

野辺地 後藤 瑞江

◎佳作(20句)

稲架組むや奥羽山脈果つる村

青森 蝦名 石蔵

稲架掛けて都会の嫁の薄化粧

青森 後藤 岑生

自家米に足る程の稲架里晴るる

藤崎 五十嵐かつ

稲架積み足跡に兎の足跡も

十和田 日野口 晃

稲架組んで津軽十万石広し

青森 佐々木一湖

稲架並ぶ曲りし畦に曲るまゝ

五所川原 三橋 浩二

掛けやすき子たの高さに稲架を組む

弘前 花田 晶子

ねっとり山気をまとふ夜の稲架

青森 高森ましら

白神の裾まで晴れて稲架を組む

深浦 草野 力丸

稲架組んで息子は町へ出勤す

十和田 佐々木寿子

稲架続く津軽鉄道うねうねと

むつ 杉山 畝女

稲架を組む僧も農夫の顔となり

青森 能登谷明子

稲架干しにこだはる気骨ありにけり

十和田 稲場 暁子

稲架解くや陸奥湾くつきり現れる

むつ 井手上省子

稲架組んで一揆の村に影つくる

つがる 石田かつら

山の風稲架を大きく廻り来る

八戸 木附沢麦青

背が少し縮んだ妻と稲を掛け

青森 下山みのる

風に乗る俵積み唄稲架日和

青森 田中フミエ

稲架高しこの一徹の隠れ里

青森 丹場 節子

花嫁は遠き日のこと稲架を組む

八戸 山谷 文子

吉田千嘉子氏選

◎天位

稲を干す子ら雀めく学校田

風間浦 蛸嶋八重子

◎地位

稲架抜きし穴に農夫の愚痴溜まる

平川 西谷 是空

◎人位

稲架棒の雑兵のごと雨に佇つ

弘前 桜庭 恵

◎秀逸(5句)

点々と稲架連なりて関所めく

青森 牧 ひろし

稲架を組む基点の杭に朱のしるし

八戸 西川 無行

山の田の稲架の低きがもう翳る

平川 後藤 朋子

夕稲架に雀ちやくちやく横並び

青森 敦賀 恵子

青空を一枚稲架へ掛けてやり

野辺地 後藤 瑞江

◎佳作(20句)

老二人声掛け合うて稲架返す

青森 布施 協一

稲架襖星の岩木嶺黒々と

弘前 笹原 郁子

稲架組むや奥羽山脈果つる村

青森 蝦名 石蔵

断崖に波打ち寄する夜の稲架

十和田 中村しおん

自家米に足る程の稲架里晴るる

藤崎 五十嵐かつ

稲架渡る風の豊かさ津軽富士

むつ 高橋千夜湖

稲架の列妻の洗濯よく乾く

弘前 泉 風信子

やや不稔なれど稲架棒香ばしき

十和田 大川 恵子

稲架を組む僧も農夫の顔となり

青森 能登谷明子

名園の借景稲架にかはりけり

青森 清野 和子

棒稲架と獅子波へだつ五能線

五所川原 櫛引 麗子

ひと跨ぎほどの島の田稲架低し

板柳 くどうひろこ

稲架解くや陸奥湾くつきり現れる

むつ 井手上省子

稲架棒を農一徹の父が挿す

青森 榊 せい子

稲架組むや大地の父の影長し

青森 工藤 邦子

ぼうぼうと汽車去りゆきて稲架の列

弘前 坂本 吟遊

稲架を組む夫婦無言を通しけり

八戸 三ヶ森青雲

海風に任せてをりぬ稲架襖

八戸 小野寺和子

稲架襖に海見えかくれローカル線

弘前 葛西 栄子

青空や津軽平野に万の稲架

七戸 高田美津子

席題A「稲架」

草野力丸氏選

◎天位

稲架棒の雑兵のごと雨に佇つ

弘前 桜庭 恵

◎佳作(20句)

稲架掛けて隠れてしまふ津軽富士

弘前 橘 すなお

あちこちに稲架組む姿日曜日

十和田 小林 五月

稲架並ぶ景を見せたき戦禍の子

青森 小林 とみ

追伸に稲架の匂ひを添へにけり

東北 井上 福子

山の風稲架を大きく廻り来る

八戸 木附沢麦青

稲架を組む夫婦無言を通しけり

八戸 三ヶ森青雲

稲架組むやひとり深き空の青

青森 安田真知子

一把づつ夫との阿吽稲架を組む

五戸 鈴木志美恵

海風に任せてをりぬ稲架襖

八戸 小野寺和子

青空や津軽平野に万の稲架

七戸 高田美津子

稲掛けのなで肩に日の溢れるて

五所川原 森下 睦子

◎地位

稲架かげで開けし鏡に岩木山

大間 金田一一子

◎人位

棒稲架と獅子波へだつ五能線

五所川原 櫛引 麗子

◎秀逸(5句)

点々と稲架連なりて関所めく

青森 牧 ひろし

稲架を組む僧も農夫の顔となり

青森 能登谷明子

稲架解ひていつきに岩木広げけり

青森 中谷 恭子

稲架組んで一揆の村に影つくる

つがる 石田かつら

新稲架にお山は藍を深めたり

五所川原 松宮 梗子

稲架解くや陸奥湾くつきり現れる

弘前 聖 雪
むつ 井手上省子

骨太は津軽の血筋稲架を組む

野辺地 後藤 瑞江

稲架解くや陸奥湾くつきり現れる

弘前 聖 雪
むつ 井手上省子

席題B
「蟋蟀」

【読み】こほろぎ
【傍題】ちちろ、ちちろ虫、つづれ
させ、えんま蟋蟀など。(歳
時記によっては、他にもあ
る場合があります)

対馬迪女 氏 選

◎天 位

「おしまひ」と本を閉ぢればちちろ鳴く

風間浦 蛸嶋八重子

◎地 位

こおろぎの鳴く闇包む大き闇

むつ 飯田 知克

◎人 位

吾がために開けある墓誌やちちろ鳴く

大間 金田一一子

◎秀 逸(5句)

遊びの輪抜けてちちろの輪に入る

弘前 泉 風信子

団欒を離れてひとり夕ちちろ

八戸 西川 無行

蟋蟀やつぶやき一つ投げ入れぬ

青森 岡部 文子

ほそぼそと風の蟋蟀鳴きつづく

青森 山田のぶ子

指揮棒をもつ蟋蟀のきつといる

青森 齋藤 修子

◎佳 作(20句)

くぐり戸を誰かぬけゆくちちろ虫

弘前 小田桐耕風

ちちろ虫ふた畝だけの磯の畑

弘前 木村あさ子

針箱の素遠なじるやつづれさせ

青森 米塚 みゑ

左耳だけに馴染めりちちろ虫

弘前 畠山 容子

つづれさせわれ一代で終る家

青森 佐々木一湖

病み臥して耳の馴れゆく夜のちちろ

青森 竹村 俊郎

蟋蟀を飼ひ家ぢゆうが籠となる

弘前 鎌田美正子

稿終へてちちろへ耳をあづけをり

深浦 草野 力丸

こおろぎや久しく焚かぬ登り窯

十和田 稲場 暁子

こほろぎや母は夜風を毒といふ

青森 敦賀 恵子

席題B「蟋蟀」

ちちろ鳴く折り鶴あまたの爆心地

板柳 くどうひろこ

眼瞑れば見えてくるものちちろ鳴く

弘前 聖 雪

歩まねばとここまで来たるちちろの夜

階上 伊藤 幻人

脈絡のなき話果てちちろ鳴く

青森 島田よう子

蟋蟀やひたと言ひ出す死後のこと

弘前 千葉 新一

蟋蟀や明日からは人棲まぬ家

青森 工藤 邦子

蟋蟀や足湯にこころ浸しおり

東北 井上 福子

昼ちちろ砂の片寄る津波の碑

五所川原 松宮 梗子

ちちろ鳴く妻の寢息の安らげく

青森 山本もとい

庖丁をいつまで握るちちろ虫

青森 対馬智恵子

金田一一子氏選

◎天位

稿終へてちちろへ耳をあづけをり

深浦 草野 力丸

◎地位

蟋蟀の鳴けば動きし猫の耳

むつ 畑中とほる

◎人位

蟋蟀や夜更けに帰る娘忍び足

むつ 杉山 畝女

◎秀逸(5句)

ちちろ鳴く墓石に妻の一句あり

青森 埴 ひさ

こおろぎの鳴く闇包む大きな闇

むつ 飯田 知克

団欒を離れてひとり夕ちちろ

八戸 西川 無行

歩まねばとどこまで来たるちちろの夜

階上 伊藤 幻人

黄泉の国いづこに有りやちちろ鳴く

青森 福井千恵子

◎佳作(20句)

蟋蟀や縄文の野に子を放つ

青森 布施 協一

蟋蟀もお薬手帳もちにけり

東北 井上 健蔵

灯を消せば五臓六腑のちちろ闇

青森 後藤 岑生

眠れねば身は蟋蟀となる心地

藤崎 五十嵐かつ

鳴き果てん難民村の昼ちちろ

青森 川村 英幸

奪衣婆を責めるが如くちちろ鳴く

むつ 永倉 みつ

ちちろ鳴く闇に馴れたり妻は亡し

青森 木村 秋湖

大国のちちろ大きな声で鳴く

青森 秋谷美智子

坐りよき切株選び昼ちちろ

弘前 花田 晶子

こおろぎや昭和の色の夕日射す

十和田 佐々木寿子

貸し家札ささくれ立ちてちちろ鳴く

青森 赤坂 雪洲

文箱に友の遺墨やちちろ鳴く

青森 能登谷明子

指揮棒をもつ蟋蟀のきつという

青森 齋藤 修子

ちちろ鳴く折り鶴あまたの爆心地

板柳 くどうひろこ

詮なしと思ふ事ありちちろ鳴く

青森 中谷 恭子

昼ちちろ地に物ひさぐ婆の辺に

青森 榊 せい子

蟋蟀や明日からは人棲まぬ家

青森 工藤 邦子

蟋蟀と杯を交わすや妻居ぬ夜

青森 下山みのる

こほろぎや看取りの夜を鳴き通す

弘前 対馬 迪女

蟋蟀やわが泣き場所の厨奥

青森 安田真知子

木村秋湖氏選

◎天位

団欒を離れてひとり夕ちちろ

八戸 西川 無行

◎佳作(20句)

重文の土間に竈ちちろ虫

弘前 笹原 郁子

貸し家札ささくれ立ちてちちろ鳴く

青森 赤坂 雪洲

文箱に友の遺墨やちちろ鳴く

青森 能登谷明子

こほろぎの萱家つらぬく太柱

五所川原 櫛引 麗子

ここも亦埋もれし遺跡昼ちちろ

青森 関 礼子

眼瞑れば見えてくるものちちろ鳴く

弘前 聖 雪

宵はまだだと蟋蟀の幼な鳴き

八戸 木附沢麦青

花街に残る黒塀ちちろ鳴く

八戸 三ヶ森青雲

こほろぎや看取りの夜を鳴き通す

弘前 対馬 迪女

蟋蟀やわが泣き場所の厨奥

青森 安田真知子

ちちろ鳴く妻の寢息の安らげく

青森 山本もとい

◎地位

こおろぎや久しく焚かぬ登り窯

十和田 稲場 暁子

◎人位

こほろぎや母は夜風を毒といふ

青森 敦賀 恵子

病み臥して耳の馴れゆく夜のちちろ

青森 竹村 俊郎

こほろぎや昔の厨土間つつぎ

青森 明才地禮子

坐りよき切株選び昼ちちろ

弘前 花田 晶子

稿終へてちちろへ耳をあづけをり

深浦 草野 力丸

ひとつ間のそれぞれひとりちちろ虫

藤崎 清水 雪江

酒蔵に瓶の数ほどちちろ虫

弘前 竹浪 克夫

◎秀逸(5句)

蟋蟀やつぶやき一つ投げ入れぬ

青森 岡部 文子

夜の更けしことこほろぎもサイレンも

青森 佐藤多太子

蟋蟀や暗がりに吸ふ煙草の火

青森 齊藤 君子

昼ちちろ砂の片寄る津波の碑

五所川原 松宮 梗子

御社に平家の名残ちちろ鳴く

八戸 山谷 文子

木附沢麦青氏選

◎天位

眼瞑れば見えてくるものちちろ鳴く

弘前 聖 雪

◎地位

ちちろ虫ふた畝だけの磯の畑

弘前 木村あさ子

◎人位

蟋蟀の指定席なり庭の隅

青森 秋元ユミ子

◎秀逸(5句)

こほろぎや昔の厨土間つつぎ

青森 明才地禮子

坐りよき切株選び昼ちちろ

弘前 花田 晶子

こおろぎや久しく焚かぬ登り窯

十和田 稲場 暁子

高々と軍馬供養塔ちちろ鳴く

弘前 斎藤ひでを

脈絡のなき話果てちちろ鳴く

青森 島田よう子

◎佳作(20句)

重文の土間に竈ちちろ虫

弘前 笹原 郁子

奪衣婆の膝によりたるつづれさせ

鱒ヶ沢 南 美智子

土間広き太宰の生家ちちろ鳴く

十和田 中村しおん

蟋蟀の遊びをせむとや生まれけむ

十和田 日野口 晃

ちちろ蟲大邸宅に灯の一つ

むつ 畑中 月穂

蟋蟀や寝落ちの早き兎の拳

むつ 高橋千夜湖

こおろぎの鳴く闇包む大き闇

むつ 飯田 知克

左耳だけに馴染めりちちろ虫

弘前 畠山 容子

病み臥して耳の馴れゆく夜のちちろ

青森 竹村 俊郎

教会の賛美歌に和すちちろ虫

青森 澁田 紀子

風景は常のごとありちちろ鳴く

青森 山口せつ子

ひとつ間のそれぞれひとりちちろ虫

藤崎 清水 雪江

ここも亦埋もれし遺跡昼ちちろ

青森 関 礼子

指揮棒をもつ蟋蟀のきつといる

青森 齋藤 修子

蟋蟀やうごかぬことが生きること

青森 高木 良子

大風のあけ蟋蟀も無事らしき

青森 小林 とみ

花街に残る黒塀ちちろ鳴く

八戸 三ヶ森青雲

蟋蟀の鳴かぬ年よと老の耳

青森 樋口 裕子

能舞台果ててちちろの鳴く城址

八戸 高橋 千恵

昼ちちろ砂の片寄る津波の碑

五所川原 松宮 梗子

